

埼玉育ちのグローバル人

ちょっと海外に行ってみた

第1回「1年のつもりが、足掛け17年…」



SAITAMA

埼玉県マスコット
「コバトン」

近藤眞理子さん



もともと海外に住むとか長期の留学とかを真剣に考えていたわけではなく、国内線の飛行機にも乗ったことがなかったのですが、ある年いきなりイギリスに留学することにしてしまいました。なぜかという、大学卒業後、高校の英語科の教員をしていましたが、転職を考えていて、大学既卒者がその仕事に応募する場合、大学院卒の資格と年齢制限があったので、特に興味があったわけではないのですが、9か月で修士の学位が取れるイギリスに行くことを思いつきました。また英語以外の外国語は大学院で勉強するほどはできなかったのと、とりあえず英語圏、という理由もありましたが、非常に安易な選択でした。結局、大学のコースが始まる前の英語コース3か月を含め、イングランドで4年、スコットランドで13年と足掛け17年、いわゆるイギリスで暮らしました。

当時は円も今のように強くなく（円安の現在からも想像がつかない、1ポンド三百数十円だったと記憶しています）、海外旅行なども新婚旅行でもなければなかなか行けない1985年6月30日に、人生初の飛行機で、少しでも安くと当時の南回り航路で、台北、シンガポール、ドバイ経由で二十数時間かけてロンドンに着きました。ヒースロー空港からバスで、目的地のレディング(Reading)に移動しました。

英語は少し英会話学校に行ったことがある程度で、今思うと非常に無謀な決断だったと思います。

私が学部生だったころは、海外留学なんて学部で一番優秀な学生くらいしか行くことができない時代でした。3週間カリフォルニアで語学研修、一週間ハワイで休暇、のような英語研修とは名ばかりのツアーが流行り始めていて、それに参加した同級生も何人かいたのですが、そんなもの行けるお金もなく英会話というものを殆どやっていたがまま、イギリスに行ってしまいました。飛行機はシートベルトの締め方も、空港ではどの通貨も使えるとか、そういうことも知りませんでした。若いというのは、怖いもの知らずで、恐ろしいものです。

大学院が始まる前に、3か月英語研修を受けましたが、今思えば夢のように楽しい時間でした。科目によっては割と上の方のクラスに入ることもでき、いい気になっていたのもつかの間、英語コース



1985年夏 英語コースの遠足

が終わり 10月に大学が始まったら、初日から絶望のどん底に落とされました。先生が講義で言っていることが一言もわからない。。真っ青になったことを覚えています。英語力はもとより、専門の知識の問題が大きかったと思います。世界中から来ている学生が、皆問題なく講義を受け、質問もどんどんする。あまりに聞き取れず、理解も出来なかったのも、先生にお願いして、講義をテープレコーダーで録音させてもらいましたが、生で聞いて聞き取れないものを、音が劣化するテープで聞いても聞き取れるわけがない。何度も繰り返していると、一時間の講義が3時間、4時間とかかるので、そんなことが長く続くわけがない。テープ録音はさっさと諦めました。またレポートなどの課題が出たときも、英語が母語の同級生に英語を直してもらおうと思っていたのですが、レポートの下書きをもっていくと、「まだ自分のができていないので」と一蹴されてしまいました。考えてみれば、自分も学部時代、レポートなどは、時間ギリギリ徹夜で仕上げるが多かったのも、当たり前でしょう。また、同じコースの人の課題を助けて、その人の方がいい成績をとったら、馬鹿みたいでしょう。もし、親切に手伝ってくれたりすることがあれば、それはこちらがバカにされているからだとすぐに状況を悟り、自力でなんでもやるように努力をしました。コースでも、イギリス人の学生より外国人留学生の方ができることが多く、「留学生なので」というのは言い訳にはならないと、すぐ学習しました。



1985年夏 お気楽だった英語コース

最初に入学したレディング大学には、当時全学で日本人の学生が4人しかおらず、みんな学部も住んでいる寮も違ったので、めったに会えなくて寂しく感じたときもありましたが、今考えるといろいろな国の友人を作る、英語に慣れる、環境適応能力をつけるという点では、良かったかもしれません。学生は、世界中から来ていて、特に大学院生は外国人の方が圧倒的に多かったのも、外国人同士、友達作りにはあまり困りませんでした。やはり海外で生活するにはいろいろ見えない大変さや、悩みなどがあるものです。外国人同士の方がことばの問題も気にならなかったし、大変さも同じ。同志として助け合いながら、時には喧嘩もしながら、良い関係を築けました。

よく世間では「国際的」とか「国際化」とか言いますが、「国際的な人」なんてものは存在しません。みんな単に自分が生活してきた国や地域（一つとは限りません）の習慣、慣習、考え方にどっぷりつかっています。それをもって、他の国、地域の習慣、慣習、考え方をどう受け入れ、折り合いをつけていくかを学ぶことが、国際化・多文化許容の過程なのだろうと思います。どの国の人でも、良い人も悪い人も、気の合う人も合わない人もいます。何か問題が起きても、いったんは険悪になっても、原因が分かれば大したことではないことがよくありました。例えば、自宅や自室などで行うパーティーの時の騒音など、日本だと周りに迷惑をかけないように、騒がないように気をつけますが、国によっては、パーティーなどでは騒音は当たり前。迷惑だったらこちらから文句を言ってやめてもらう等、単なる習慣、常識、対応の仕方の違いであると学びました。日本人を含む当時の英語コースの友人や寮の仲間たち十人強とは、40年近く経つ今でも連絡を取っています。お互い、仕事や出張、休暇などで、互いの国を訪問したときに会うこともあります。最近ではSNSなどのおかげで、以前よりも簡単に連絡が取れるようになりました。

レディング大学では、教員経験年数が足りず希望の修士課程のコースに入れなかったのも、少し

異なるコースに登録し、翌年ロンドン大学に移りましたが、じっくり勉強してみて、言語教育という分野に興味を持てなかったため、翌年音声学に専門を変更し、当時イギリスで珍しかった二年間の修士からやり直すことにしました。このころまでには、英語にもイギリスにも慣れて来ましたが、イギリスの生活が長くなると、最初のころはイギリスで目にする事、経験することは良いこと、悪いこと、いやなことを含めて何でも新鮮で、面白かったのが、次第に興味や新鮮さも薄れ、逆にイギリス社会や大学の問題点ばかりが目につくようになってきました。一時は日本人の友人と過ごしたり、日本のものに触れる時間を増やしたりした時期もあります。それがひとしきり続いた後、またいろいろ周りのことを違った目でみられるようになりました。日本に対しても、良い面、悪い面を客観的にみられるようになりました。海外に長く暮らす人たちが普通に通る道だと思います。

の通訳など、可能な範囲で少しでもお金になることは何でもやりました。社会を知るという意味ではとても良い経験でしたが、勉強との両立はとても大変でした。

博士課程は、スコットランドのエディンバラ大学で音声学を専攻することにし、1989年8月にイングランドからスコットランドに引っ越しました。



1986年冬 寮の食事会でおめかし

二度目の修士が終わったら帰国するつもりだったのですが、最初イギリス留学を目指したきっかけである希望していた転職先は専門を変えてしまったことで興味がなくなり、将来の仕事を考えたときに、研究職しかないと感じ、博士課程に進むことにしました。大した貯えもなく留学してしまったので、イギリスについてから、日本人学校の補習校で国語を教えるアルバイトや、放送局での翻訳のアルバイト、大学の日本語学科での非常勤、裁判